

文学に哲学を見出す——文学教材と説明的文章教材の接点——

守田 庸一

一、はじめに

文学をどのように読めばよいのか。文学を教材として扱うとき、いかなる教育を求めるかによつて、期待される読みの姿は異なったものとなる。それゆえ、過去の国語科教育に関わる研究において、多くの論者が様々な見解を示してきた。本稿もまた、文学の読み方の一提案として位置づけられるものである。

ここでは、文学に哲学を見出す読みを提示したい。哲学の話題は、とりわけ中学校や高等学校での説明的文章教材、すなわち論説・評論教材でより直接的に扱われる。その一方で、文学に目を向けてみると、小学校の教材に哲学を見出すことが可能である。つまり子どもは、後に中学校・高校での論説・評論教材の学習において接することになる哲学的課題を、先取りして小学校の文学教材で触れることができるのである。

二、本稿の目的

これまでの国語科教育研究では、文学教材と説明的文章教材のそれぞれについての考察は深められてきたが、両者の接続については未だに明らかになっていない。こうした状況を打開する上で、小学校の文学教材に、中学校・高校の論説・評論教材で扱われるような哲学的課題を見出すことは有効であると考えられる。

過去に発行された文献の中には、小学校の物語教材に哲学的な問題が潜むことを指摘する教材論もある。例えば石原（二〇〇九）では、「小学国語にこそ哲学がある」と題した節において、小学校低学年の教材「お手紙」を寓話として読み、いくつかの教訓を見出している。そこでは「哲学者のジャック・デリダ」の発言である「手紙は必ず（正しい）宛先に届く」が援用され、小学校の物語教材と哲学との接続が図られている。

ただし、デリダの言う「手紙は必ず（正しい）宛先に届く」が、説明的文章教材とどのように関わるのかは不明である。また同書ではその直後に小学校四年生の説明的文章教材「アップとルーズで伝える」を取り上げて「メディア・リテラシーにつながるすぐれた教材」と評しているが、これは、先に紹介した「お手紙」に関する議論とは切り離された考察である。つまり石原（二〇〇九）は、文学教材と説明的文章教材を分けて扱っているのである。一方、本稿の目的は両者の接点を示すことにある。

三、二項対立の束縛——説明的文章教材——

ここで言う「二項対立」とは、ある概念を考える上で反対の概念を対置することである。例えば石原（二〇〇〇）が説明しているように、二項対立による思考方法は近代적であり、現代思想はその相対化を企図している。しかし、二項対立を思考の次元で克服することは容易ではない。例えば本稿における先の記述「二項対立による思考方法は近代的であり、現代思想はその相対化を企図している」の根底にも、「近代」と「現代」とを対置する発想がある。「近代」を問い直すためにはそれに対立する概念（「現代」など）を持ち込まなければならず、それゆえ二項対立は避けられない。このことは、石原（二〇〇〇）も指

摘している問題である。

国語教科書所収の説明的文章教材においても、その多くに二項対立の発想をとらえることができる。いくつかを挙げてみよう。

「みぶりでつたえる」(小学校一年・教育出版)……みぶり／ことば

「米と麦」(小学校三年・三省堂)……イネ／コムギ

「動物の体と気候」(小学校五年・東京書籍)

……寒い地方に住む動物／暖かい(暑い) 地方に住む動物

「若者が文化を創造する」(中学校二年・学校図書)……サル／人間

「水の東西」(高校国語総合・第一学習社ほか)……鹿おどし／噴水

『である』ひとと『すること』(高校現代文・数研出版ほか)……である／する

右には、異学年の、違う会社の発行する教科書に載っている教材を意図的に示した。同じ会社の国語教科書を学年順に見た場合でも、例えば光村図書であれば、小学校一年生の教科書に掲載されている教材「どうぶつの赤ちゃん」ではライオンとしまうまが対置されており、六年生の教材「生き物はつながりの中に」では生き物(本物のイヌ)とロボット(イヌ型ロボット)が対置されている。また、その間(二・五年)の教材の中にも、二項が対立する説明的文章がある。すなわち、ある特定の会社が発行する教科書において、二項対立の系譜を描けるのである。

小学校一年生から高校(現代文)に至るまで、二項対立の発想に基づいた説明的文章教

材は枚挙にいとまがない。そして、説明的文章教材が二項対立の発想によって記されていることを積極的に活かそうとした提案も、これまでに論じられてきた²⁾。

こうした状況は、説明的文章教材において二項対立の発想を乗り越えることの困難さを示している。例えば右に紹介した「水の東西」は、これまで「高校入門期の代表的な評論教材」として位置づけられてきた³⁾。鹿おどしと噴水を対置して前者に日本人の心の現れを見る同教材の筆者は、二項対立の発想に縛られていると言える。こうした教材を高校生にどのように読ませるべきなのか。小学校一年生の時から先に紹介したような二項対立の説明的文章教材を読み、二つの物事を対比する発想に親しんできた彼らに読ませるのなら、二項対立を確認するだけに終わったのでは学びとして不十分である。そこから一歩進んで、鹿おどしと噴水を対比することが適切なのかを考える読み、つまり二項対立の発想の妥当性を吟味する読みを促すべきであろう。だが、筆者が権威づけられ書かれていることの確認に終始するような教室では、こうした批判的な読みは実現しにくいと考えられる。ちなみに、稿者はこの論稿を説明的文章の文体で記しており、「文学教材」と「説明的文章教材」を対置して論じている。つまり本稿もまた、二項対立の発想による説明的文章表現の一事例である。二項対立は思考の方法であるがゆえに、それだけその束縛は強固であるといえよう。

四、二項対立からの脱却 — 文学教材 —

「かきこじぞう」は、「二」で引用した石原（二〇〇九）が取り上げている「お手紙」と同じように、多くの教科書に載っている小学校低学年の教材である⁴⁾。

大晦日、貧しいじいさまとばあさまは菅笠を編み、じいさまが大年の市の立つ町に売りに行くが、まったく売れない。じいさまは、帰り道の道端に立っていたじぞうさまの頭の雪をかき落とし、肩や背をなで、売り物の菅笠と自分の手ぬぐいをかぶせる。家でじいさまを迎えたばあさまは、その話を聞いても嫌な顔をせず、二人は餅つきの真似をして床につく。すると真夜中頃になって、じぞうさまが米の餅、栗の餅の俵などを運んでくる――。この「かさこじぞう」のストーリーには、次に示すような対立をとらえることができる。これらはいずれも、片方の存在がもう片方の存在を際立たせるといふ関係にある。

菅笠を売りに行くじいさま／家で待つばあさま

じいさまとばあさまの家の、何もない座敷／大年の市の大にぎわい

貧しいじいさまとばあさま（の家）／長じやどん（の屋敷）

ひどいふぶきの野原／家の中のいろり

さてその一方で、次の引用に見られる、ばあさまがじいさまの行為を評して語った「ええこと」は、対立する概念を見出しにくい言葉である。

じいさまは、とちゅうまで来ると、じぞうさまが雪にうもれていた話をして、

「それでおら、かさこかぶせてきた。」

と言いました。すると、ばあさまはいやなかおひとつしなないで、

「おお、それはええことをしなすった。じぞうさまも、この雪じやさぞつめたかろうも

ん。さあさあ、じいさま、いろいろに来て当たってください。」

(東京書籍『新しい国語 二下』(平成二二年検定済教科書)、六八く六九頁。傍線は守田による。)

ここでの「ええこと」に相對する概念の想定は困難である。仮にじいさまがじどうさまの前を素通りしたとしても、それは「悪いこと」ではない。貧しいじいさまにとって菅笠は唯一の売り物なのである。語り手は「ばあさまはいやなかおひとつしないで」と語っている。この叙述は、何も得ずに売り物の菅笠をじどうさまにかぶせ帰ってくるという行為が、「いやなかお」をされる可能性のある行いであつたことを暗示している。そうであるならば、この「ええこと」は、「悪いこと」と對になるどころか、人によつては「悪いこと」に通じる否定的な表現、例えば「望ましくないこと」に換言されかねないのである。「ええこと」の内実は読者によつて意味づけられるが、それは何らかの對立概念を持ち出すことでもたらされるべきものではなからう。ばあさまの言う「ええこと」は、對立する概念を設けられない、すなわち二項對立ではとらえきれない概念なのである。様々な對立が埋め込まれたストーリーにおいて、對立の構図ではとらえられない概念が示される。ここに、二項對立を内破する力を垣間見ることができないか。「かさこじどう」を読む中で、子どもたちは、二項對立の發想を乗り越える「ええこと」という概念に出会う。この経験が、その後の説明的文章教材の学習で活かされることが望まれる。「かさこじどう」の教材研究において、二項對立を相對化する、さらには世界を二元論でとらえる見方(二元論的世界觀)を問い直すといった哲學的課題を見出す時、この教材での学びは、将来の説明的文章教材での学びに結びつくものとして立ち上がるのである。

五、おわりに

文学教材の読みにおいて二項対立ではとらえられない概念と出会うことが、二項対立の相対化や二元論的世界観の問い直しをもたらす。そしてそれは、二項対立の発想によって記されている説明的文章教材の読みを変えていく可能性がある。本稿で描こうとした文学教材と説明的文章教材の接点は、ここにある。

こうした接点を得るためには、まずは文学に哲学を見出す読みの実践とその充実が求められよう。ここでは二項対立に焦点を絞って論じたが、これ以外に、文学教材にいかなる哲学的課題を見出すことができるのか、稿を改めてさらに追究したい。

注

1 現行の国語教科書（平成二二年検定済教科書）では、全五社の教科書すべてに「お手紙」が掲載されており、四社（光村図書・東京書籍・学校図書・三省堂）は二年生の教材として、一社（教育出版）は一年生の教材として扱っている。

2 例えば文芸研（文芸教育研究協議会）の「説明文の系統指導」では、「認識の力」を育むために「対比でものごとをとらえ、表現する方法」を学ばせることが主張されている。

3 間瀬（二〇〇四）。阿武（二〇〇四）によれば、「水の東西」は一九八二年から複数の高校国語教科書に掲載されてきた。また、現行の「国語総合」の教科書（平成一四・一八・二二年検定済教科書）においても、七社一三冊に収録されている。こうした

事実をふまえるならば、間瀬（二〇〇四）による「水の東西」の位置づけの妥当性が認められよう。

4 現行の国語教科書では、光村図書を除く四社が「かさこじぞう」を二年生の教材として扱っている。

引用文献・主要参考文献

阿武 泉（二〇〇四）「戦後高等学校国語教科書データベース」。

石原千秋（二〇〇〇）『教養としての大学受験国語』、筑摩書房、一五～一六頁。

石原千秋（二〇〇九）『国語教科書の中の「日本」』、筑摩書房、九〇～一〇一頁。

西郷竹彦（一九八九）『文芸研 国語教育事典』、明治図書、一〇〇～一〇一頁。

間瀬茂夫（二〇〇四）「教材の批評性と学習者をつなぐ読みの指導」、『月刊国語教育』一

〇月号、東京法令出版、三二～三五頁。

（教科書の引用については本文中に詳細を記した。）